「生デまちづくり」プロジェクト
-社会人基礎力育成の教材開発-
"Seide Machi-Zukuri" Project
Project learning for Fundamentals of social workers

木村典子、菅瀬君子、後藤恵子、秦真人、江良友子、山本豊、小山田尚弘
Noriko Kimura, Kimiko Sugase, Keiko Goto, Mahito Hata,Tomoko Era, Yutaka Yamamoto, Naohiro Oyamada

愛知学泉短期大学

キーワード
プロジェクト学習 Project learning、社会人基礎力 Fundamentals of social workers、
自己評価 Self-evaluation、教材開発 Development of teaching materials

要約
生活デザイン総合学科の教員で、大学周辺地域の「まちづくり」プロジェクトを題材に、プロジェクト学習に基づき、学生の養われていく「社会人基礎力」を育成する教材を開発した。知識と実践の融合による社会人基礎力の育成のプロジェクト学習である。本稿では、社会人基礎力育成の教材である「生デ まちづくりプロジェクト」を示し、その効果を学生の自己評価から考察した。

1.はじめに

社会の状況、環境、最新技術、知識は刻々と変化し、関わる人たちも変わっていく。仕事をしていくうえで、前回と同じということはなく、一人ひとりが最新の情報を得て、お互いが協力し、工夫や知恵を出し合って、課題を遂行していく。そのため、大学では、専門的な知識・技能の習得のみならず、活用して、課題を見出し、解決するための思考力・判断力・表現力などの育成が求められている。学生たちは、知識・技能を陳腐化しないように常に更新する必要があり、生涯にわたって学び続け、主体的に考える力を身につけることが求められている。

生活デザイン総合学科のディプロマポリシーは、本学の教育目標と教育方針の下に、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して、社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能、②変化する社会の中で自己の価値観を確立しながら職業の選択だけでなくライフスタイルを自らデザインできる能力に必要な専門的知識・技能、③建学の精神・社会人基礎力・pisa 型学力を統合的に身に付け、社会に出てからはこれらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。

卒業時には、学生は自己の潜在能力を開発しながら地域・社会に貢献できる汎用性能力、学生が社会を生き抜いていく力である「社会人基礎力」を身につけることが必要とされている。それを育成していくことが、私たち教員に求められている。

「社会人基礎力」は、前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力の 3 つを融合して発揮することが必要である。つまり、多くの情報から、見極める力、それを頭で考え、活かし、自分と異なる価値観・文化を持つ人へ主張だけではなく、互いに知恵を出し合い、ベストな解決策を考えだせる創造的な力である。「社会人基礎力」を高めるには、学生自らが、自分自身を客観視できるメタ認知を高め、自身を変容させてことも大切となる。

大学での学びを価値あるものにするのに、プロジェクト学習は有効である。それは、プロジェクト学習は現実社会の中で展開していくため、つねに考え、状況に対応しながら、展開していく知的活動の連続であるからである。プロジェクト学習の過程を意識させるために、学習の段階を準備、ゴールの共有、企画・実施、調査・分析、広報などと細分化して、①達成したことが何であるか、②どうしてそれが高く評価されることなのか、③学生の達成感や自己効力感を高め、④次の課題が何であるかをみつけ、学生の学習活動を促進していくからである。

プロジェクト学習の評価は、学生のパフォーマンスによって表現されものを評価していくことが必要となる。McTighe は、永続的理解について、得た知識・スキルを学生自らが、思考、判断、表現できることと説明している。つまり、知識やスキルはただ知っているだけでなく、実社会など複雑な状況の中で使いこなすことがパフォーマンスとなる。

そこで、生活デザイン総合学科の教員で、知識と実践の融合による社会人基礎力の育成のために、大学周辺地域の「まちづくり」プロジェクトを題材に、プロジェクト学習に基づき、学生の養われていく「社会人基礎力」を育成する教材を開発した。そのプロジェクト学習の評価をパフォーマンス評価、自己評価、外部評価を行った。

今回は、社会人基礎力育成の教材である「生デ　まちづくりプロジェクト」を示し、学生の自己評価から、学習の効果を報告する。

2.目的

大学周辺地域の「まちづくり」プロジェクトを教材として、学生の養われていく「社会人基礎力」の教材を開発する。

3.用語の定義

1) プロジェクト

目標を決め、そこへの到達目標を決め、そこへの到達方法を考え、何かをなすこと、夢や願いを成果として目に見えるものとすること。課題解決しつつ、ビジョンを実現する一連の活動からなる。

2) プロジェクト学習

学習者自身が何のため(ビジョン)に、何をやり遂げたいか(ゴール)を明確にして、向かう学習であり、学習過程に、準備、ビジョン・ゴールの設定、計画、情報・解決策、実施、プレゼンテーション、再構築、成長がある。学習過程を通して、成長していく学びである。

3)社会人基礎力

経済産業省が 2006 年から提唱している「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力（12 の能力要素）から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」である。企業や若者を取り巻く環境変化により、「基礎学力」「専門知識」に加え、それらをうまく活用していくための「社会人基礎力」を意識的に育成していくことが今まで以上に重要視されている能力である。

4.概念図

プロジェクト学習と社会人基礎力の関係を図 1 の概念図で示した。

学習者がビジョン、ゴールを明確にして学習していく過程で、チームで協力し、さまざまな知識を活用し、計画を立て、実施、制作などの過程を通して、生きる力、汎用性能力、社会人基礎力、キャリア形成能力を身につけていくプロジェクト学習の概念図を示している。

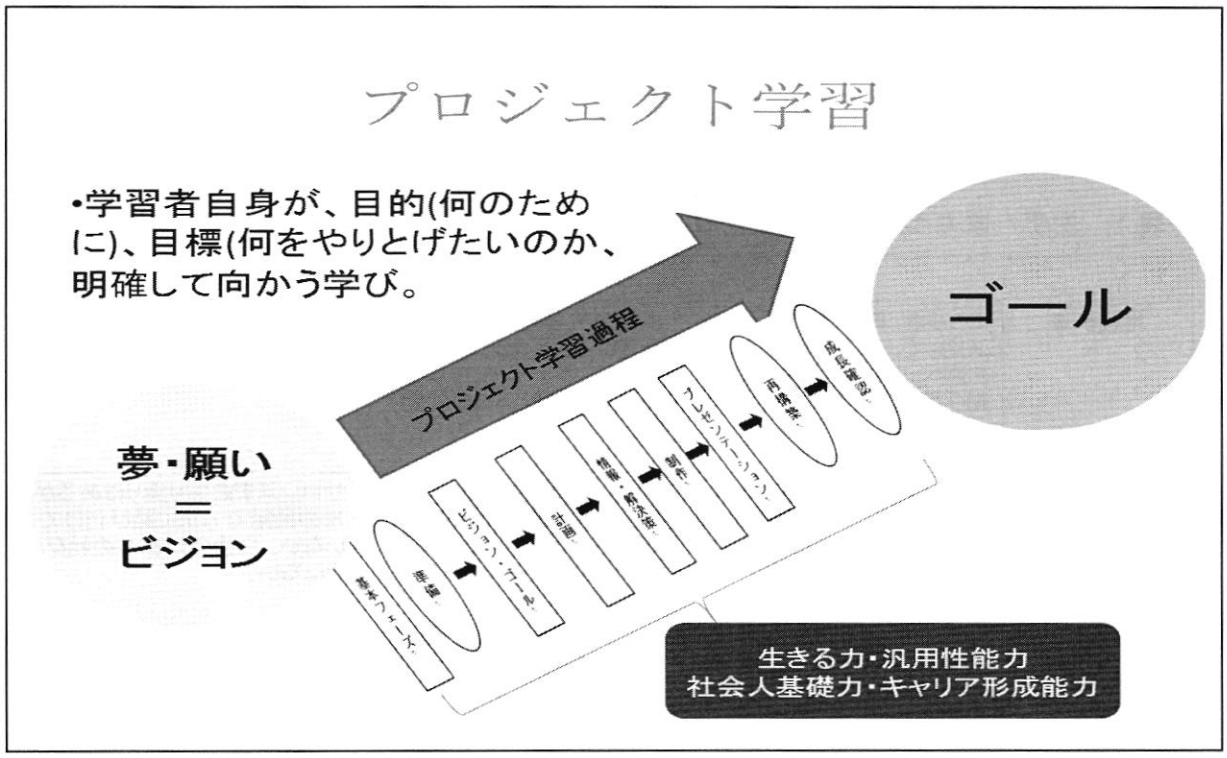


図 1　　プロジェクト学習と社会人基礎力

5.教材「生デ　まちづくりプロジェクト」のプロジェクト学習

1)教材の概要

プロジェクト学習では、題材を「まちづくり」、ビジョンを「地域と学生との交流を増やし、地域力の高いまちにしたい」、ゴールを「矢作北地域の特徴を踏まえて、地域力を高めるためのサロンの提案集をつくる」とした。大学の周辺の地域住民を対象とした木曜サロンの活動を通して、よりよいサロンの提案である。サロン活動の実施に主眼を置くのではなく。その活動を通して、学生達、学んだ知識を活用するために、自ら考え、行動、振り返りをし、よりよいサロンの提案を自分言葉で表現できることにあった。

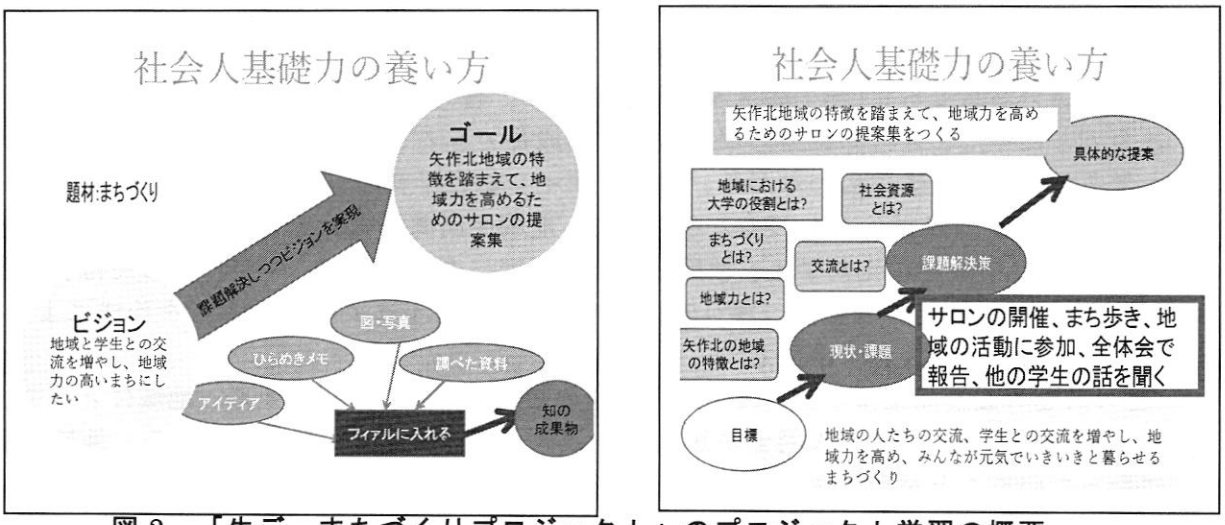


図 2　「生デ　まちづくりプロジェクト」のプロジェクト学習の概要

McTighe の示している永続的理解を参考に、学生が修得した知識・スキルを活用して、思考・判断・表現できる教材とした。また、能力としてパフォーマンス能力を念頭にいれた。学生へ提示したパフォーマンス課題を「サロンの開催、まち歩き、地域の活動に参加、全体会の報告の活動を通して、矢作北地域の特徴を踏まえて、地域力を高めるためのサロンの提案集をつくる」とした。そのルーブリックをつくり評価した。観点は、地域調査・リフレクション・内容・体裁とした。

表1　生デ　まちづくりプロジェクト学習のルーブリック

	A	B	C
地域調査	まち歩き、岡崎市のデータを活用して、矢作北地域の特徴を述べ、サロン活動の提案に結びつけている。	まち歩き、岡崎市のデータを活用して、矢作北地域の特徴を示しているが、サロン活動の提案に結びつきに欠ける	まち歩き、岡崎市のデータのいずれかは示しているもしくは、示していない。
リフレクション	サロン活動を振り返り、よりよくする方法を述べ、提案に結び付けている。サロン活動の成果、今後の展望が述べられている	サロン活動を振り返りはあるが、次の段階であるよりよくする方法に結び付けていない。行ったことの繰り返すことを示している	サロン活動を振り返りはあるが、次の段階で方法に結び付けていない。今後の活動への結びつきはない。
内容	提案しているサロン活動には、理由付けがあり、実行可能で明確である。	サロン活動の提案はあるが、実践するには、修正が必要である。理由付けがすくない。	提案されいるサロン活動は実現不可能であり、理由づけはない。
体裁	絵・色などを入れて、わかりやすく工夫している。文の体裁は整えられており、違和感なく読める。誤字脱字がない。	絵・色を入れているが、内容と結びついていない。一部誤字脱字がみられる。	全体の体裁が整えられていない。誤字脱字が多い

プロジェクト学習の段階と教材として流れの日程の概要の一部を表2に示した。平成29年1月から始まり12月まで続いている。1月から3月は準備の段階で、先輩が計画したサロン活動への参加、街歩きを通して、矢作北地域の特徴、サロンの概要を捉える。4月から12月はゼミごと、またはそれぞれのゼミが協力してサロン活動の内容を検討し、実施していった。一連の活動を通して、パフォーマンス課題を行い、発表するようにした。

期待される効果は、知識と実践の融合による社会人基礎力の育成によって、「学生の社会人基礎力が高まる」「学生のメタ認知が高まり、自らのセルフコーチング能力が高まり、社会人となったときに即戦力となれる人材に成長できることが期待され」「地元に愛される大学として地域活性化につながり、生活デザイン総合学科の目指す地域貢献のできる人材育成ができる」「地域のまちづくりを通して、地域住民間、学生と地域の人の間に地域連帯ができる」「領域を超えた学生、教員との連携が密になることで、学生にとっては、学習の幅が広がり、教員間の研鑽につながる」「他の教員がプロジェクト学習教材を作成によって、活用することができる」がある。

この活動の波及効果は学生のみならず、他の教員、地域の方へも及ぶ。地域にとって、サロン活動の場は、地域の人同士が知り合い、ネットワークづくりにつながり、地域の活力になっていくことが予想される。

表 2　生デ　まちづくりプロジェクト活動行程（平成 29 年 1 月～11 月）

月日	フェーズ	内容
1 月	準備	プロジェクト学習の考え方と流れをつかむ 基本フェーズの流れを俯瞰し、学習で身つく力を知る 生デまちづくりプロジェクトのまちづくりのイメージを膨らませる 2/23、3/23 のいずれかのサロン活動に参加する。
2 月		まちづくりとサロン活動について、イメージをつける。 サロン活動の役割分担、
2 月		サロン活動に参加する。 参加された高齢者・地域住民より、地域の特徴をインタビューする。 高齢者の特徴を知る。
3 月		前回参加した学生からの報告を聞く まちづくりとサロン活動について、イメージをつける。 サロン活動の役割分担
3 月		サロン活動に参加する。 参加された高齢者・地域住民より、地域の特徴をインタビューする。 高齢者の特徴を知る。
4 月		まちの概要を知る ゼミで、大学から、徒歩 15 分圏内のまちの様子を知る。写真、地図作成。インターネットより情報収集 自分たちの所属のゼミの強み、特徴を理解する。
4 月	ゴール 計画	全体会　わたしが知った矢作北のまち 4 月のサロン活動予定の発表
4 月	実施	木村・後藤・山本ゼミでサロンを実施
5 月	情報・解決策	全体会　　サロン活動予定の発表、活動報告
5 月	実施	秦・江良ゼミでサロンを実施
6 月	情報・解決策	全体会　　サロン活動予定の発表、活動報告
6 月	実施	小山田・菅瀬ゼミでサロンを実施
7 月	制作	元ポートフォリオから A3 サイズ、一枚に、テーマ、提案、課題を書いた資料を作成 テーマ「よりよいサロンの提案」
7 月	実施	提案書をもとに、木村・江良ゼミでサロンを実施
8 月	プレゼン 成長確認	全体会 中間評価
9 月	実施	提案書をもとに、菅瀬・秦ゼミでサロンを実施
9 月	プレゼン	全体会　　サロン活動予定の発表、活動報告
11 月	実施	提案書をもとに、後藤ゼミでサロンを実施、 菅瀬・木村・山本・秦ゼミも協力

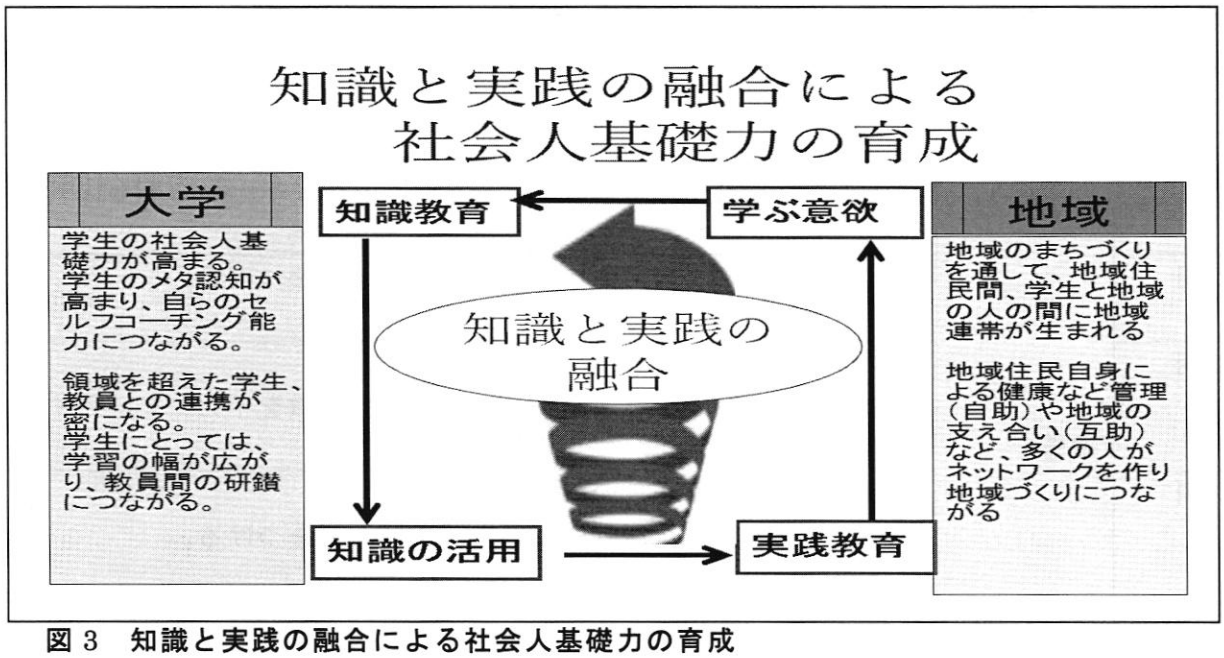
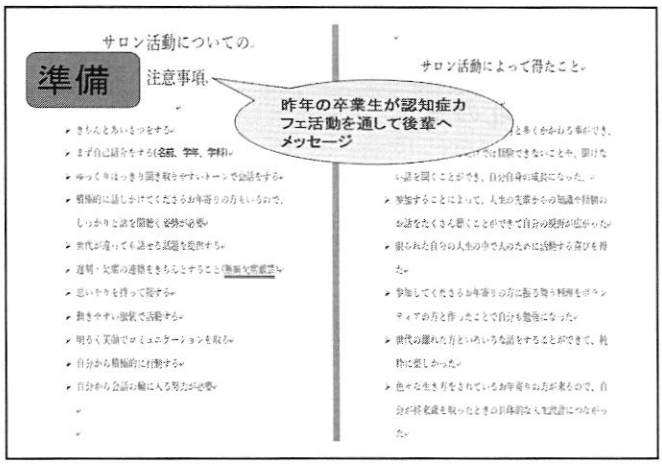
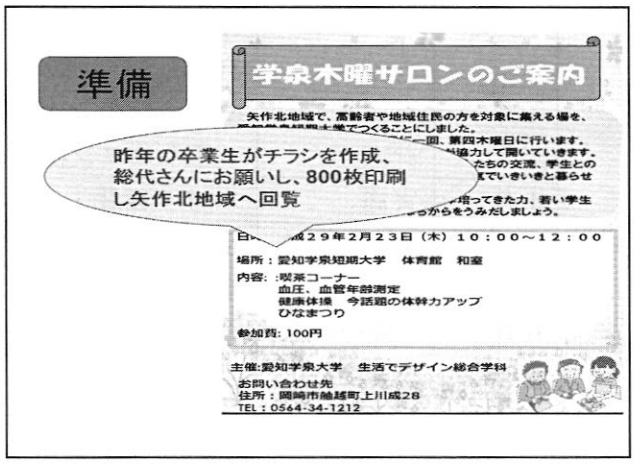


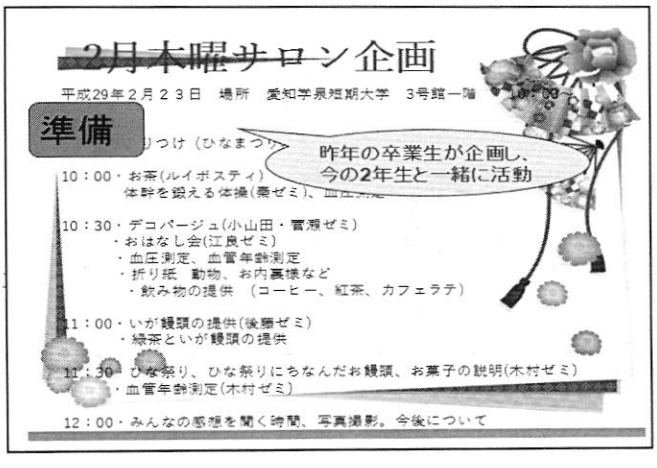
図３　知識と実践の融合による社会人基礎力の育成

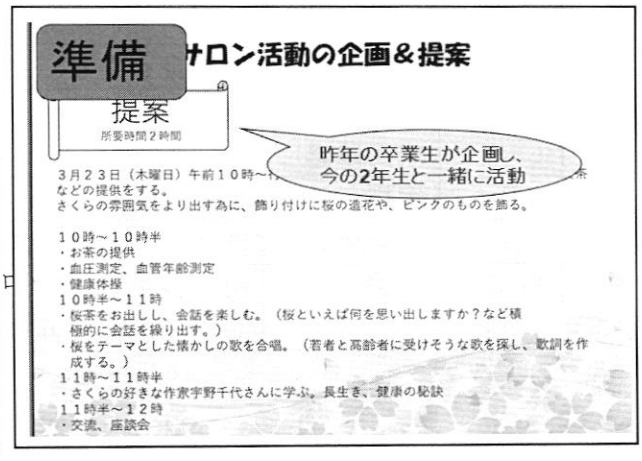
2)フェーズごとの「生デ　まちづくりプロジェクト」の学習の進み方

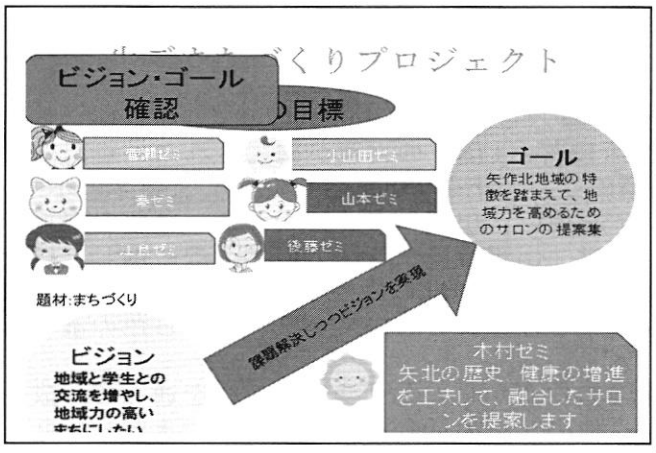
フェーズごとのプロジェクト学習の段階である準備、ゴール・ビジョンの確認、情報収集、実施、プレゼン、成長確認の段階を以下に示した。

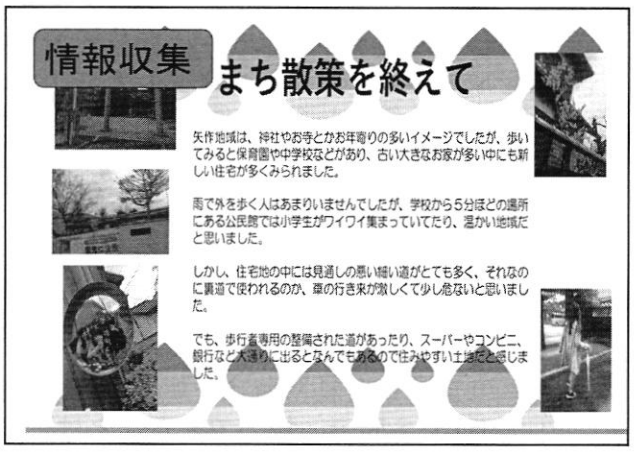


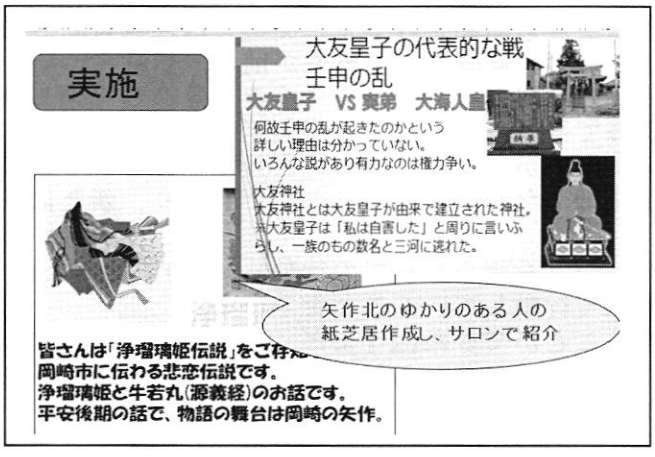


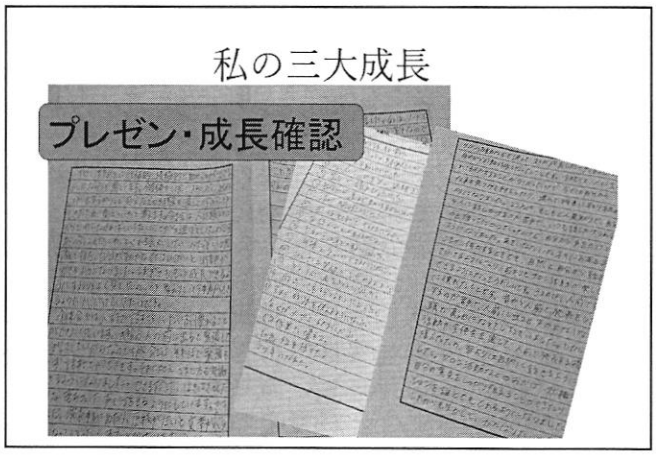












6.プロジェクト活動「生デ　まちづくり　プロジェクト」の成果

1)学生の自己評価　「わたしの三大成長」のレポート、平成 29 年 8 月中間評価

平成 29 年 8 月、プロジェクト中間期に、活動を振り返り、「わたしの三大成長」を学生に、記載してもらった。この自由記述の分析に、KH Coder を使用した。その理由は KH Coder は、語の選択にあたり恣意的となりえる「手作業」を廃し、多変量解析によってデータ全体を要約すること、コーディング規則の手順を踏むことで、客観性を確保して、学

生の自由記述の全体的な傾向をとらえることができるからである。

分析方法はテキストファイルに入力された自由記述を読み込み、テキストから自動的に語を取り出し、頻出語を確認したうえで、語の共起関係を探った。

学生から得られた97件の自由記述を分析対象とし、KH Coderを用いて、前処理を実行して、文章の単純集計を行った結果、471 の段落、1133 の文章が確認された。総出語数31510、異なり語数1729であった。頻出語のうち、上位50語とその頻度を表3に示す。

次に、KH Coderの共起ネットのコマンドを使い、出現パターンの似通った語を線で結んだネットワークを描いた。分析にあたっては、出現数による語の取捨選択に関しては最小出現数を15に設定し、描画する共起関係の描画数を60に設定した。強い共起ほど、大きい円で描画されている。語の色分けは媒介中心性によるものであり、白から色の濃いものの順に中心性が高くなることを示す。

共起関係から自由記述を要約すると、図4の左下から、①「サロン活動を通しての成長した」「ゼミ間で、協力できたことはよい」「他のゼミの活動を聞くことができた」であった。学生が実際に記した文を『』で示した。

『大学に通っているその土地のことを理解しサロン活動を行っていくことは地域貢献活動につながると思います。』『活動を通して、創造力、傾聴力、柔軟性が前よりも身についたと思います。』『最近は他のゼミのサロン活動の時でも自分でもできることを探して少し動けるようになりました。』『アンケートをやって発表しているゼミがありとても分かりやすかったので自分たちのゼミがやる時もアンケートができればと思いました。あと私が参加した時のサロン活動の報告会の時でも私が気付かなかったところもなどもあり、新たに気付くことができました。』

②「行動」を中心に、「周りを見て行動できた」「役割をもっての行動」「行動を考えた」

『ほかの人に任せるのではなく、自分で考えて行動していくことを学びました。』

『自分のすべきことを、周りを見て行動することができた。』『まだ、言われてから行動していた時もありますが、回を重ねるごとになるべく自分から行動すべきだろうと考えることができるようになったかなと思いました。』

③「話す」を中心に、「コミュニケーション能力が話すことで伸びた」「少し話すことが苦手であったが、話かけることで話すことができた」「高齢者と話すことができた」

『最初はなかなか会話できなかったし、高齢者の方と接することさえできませんでした。しかし、回数を重ねていくにつれて、高齢者の方と少しずつコミュニケーションがとれるようになりました。』『アルバイト先でも積極的に話しかけることはありませんでした。しかし、サロン活動ではそうも、いかないので自分から話しかけてみましたが、意外と温厚な方が多く、とても話しやすかったです。その後も積極的に話しかけていき、コミュニケーションをとるようになったと思います。』

④「全体で発表する前に提案を行った」

『私は人前で話したり、自主的に行動したりと自らの言葉、行動を起こすのは苦手だったけど、サロン活動ではみんなで作り上げるものだからこそ、自分の役割がありそこで前に立って発表したり、料理の説明をパワーポイントで行ったり、自分の嫌いな分野だけど緊張しながらも当日は自信をもってしっかり行うことができました。』

その他に⑤「楽しい気持ちになった」⑥「相手に説明が伝わるか考えた」⑦「社会に出てから生かすことができる」⑧「地域の方々と交流することができた」があった。

表2 頻出語の上位50

順位	語	出現回数	順位	語	出現回数	順位	語	出現回数	順位	語	出現回数	順位	語	出現回数
1	サロン	375	11	考える	88	21	積極	61	31	他	44	41	少し	37
2	活動	365	12	話す	82	22	時間	59	32	地域	42	42	大切	37
3	自分	300	13	年寄り	73	23	行う	58	33	動く	42	43	感じる	36
4	思う	293	14	学ぶ	72	24	多い	58	34	発表	40	44	声	35
5	ゼミ	135	15	木曜	72	25	出来る	57	35	聞く	40	45	知る	35
6	人	126	16	高齢	71	26	協力	56	36	来る	40	46	前	34
7	成長	121	17	周り	69	27	作る	50	37	方々	39	47	提案	33
8	行動	116	18	見る	65	28	役割	49	38	良い	39	48	機会	32
9	コミュニケーション	98	19	今	64	29	たくさん	47	39	力	39	49	身	32
10	参加	96	20	話しかける	62	30	話	47	40	苦手	38	50	意見	31

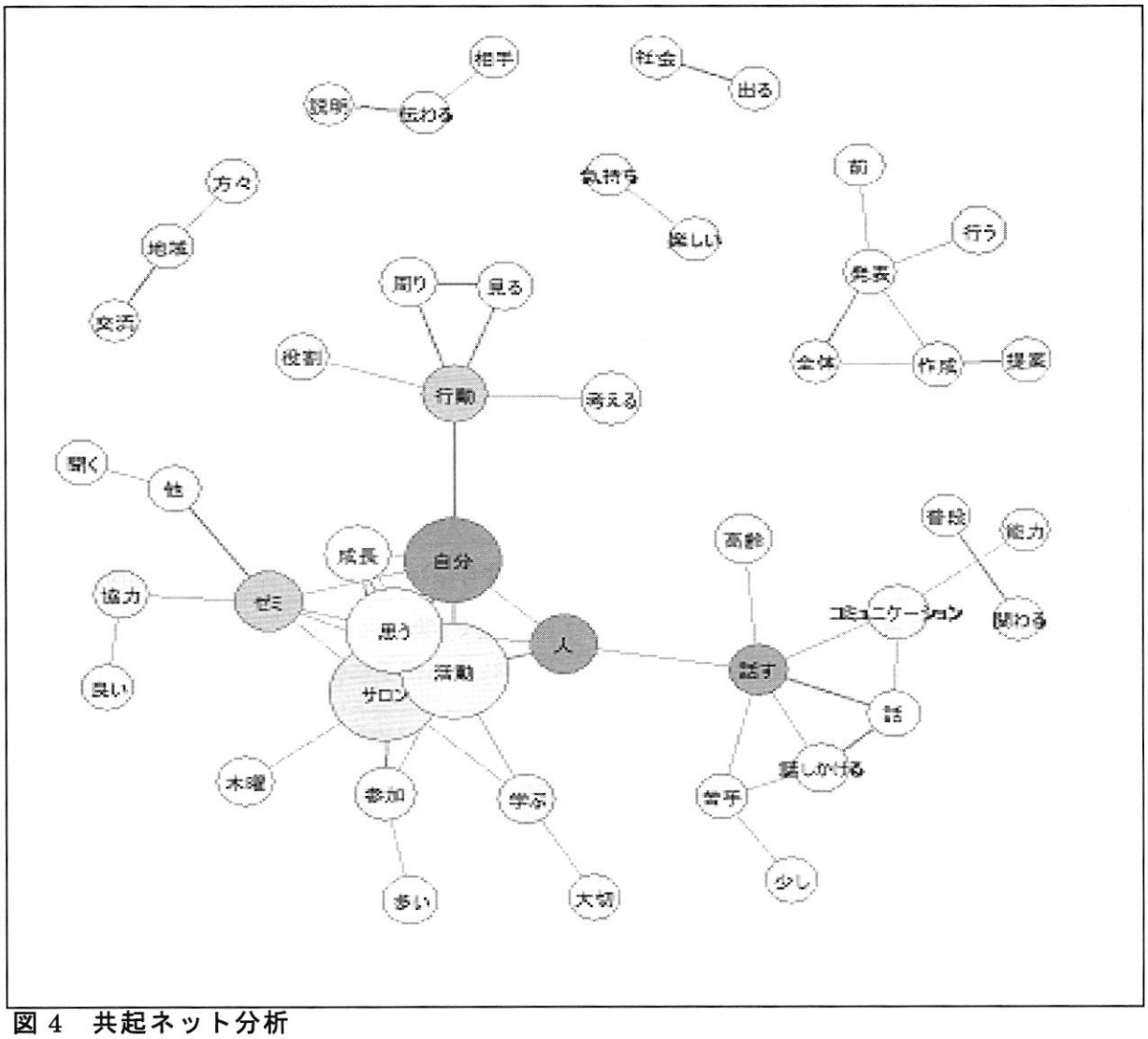


図 4　共起ネット分析

2)授業で取り組む社会人基礎力の変化　平成 29 年 5 月と平成 29 年 10 月の変化

授業で取り組む社会人基礎力の変化を【授業版】社会人基礎力セルフチェツクシートにて、平成 29 年 5 月と平成 29 年 10 月の変化をみた。社会人基礎力 12 要素のそれぞれにある 10 の項目の学生が達成している人の割合の平均を表 4 に示した。平成 29 年 5 月と 10 月で比べて、達成率の上昇している社会人基礎力 12 要素はなかった。平成 29 年 10 月の時点で、達成率の高い項目、達成率の低い項目 10 項目ずつ示した。学生が 80%以上できている項目に、「傾聴力　話を聞く時は、うなずきやあいづちをしながら聞いた」「発信力　相手の目（顔）を見て話した」「立場によって、意見や考え方が違うということを理解し対応した」「柔軟性　自分にとって良くない結果が出ても事実として受け止めることができた」があった。学生ができていないと答えている項目に「主体性　シラバスで定められている内容以上の復習を行った」「実行力　シラバスに書かれた予習、復習は行った」「主体性　授業中、発言の機会があれば積極的に発言した」「主体性　授業中、発言の機会があれば積極的に発言した」があった。平成 29 年 5 月と比べ、プラスに達成率が変化した項目を示した。「主体性　授業は欠席しなかった」「実行力　シラバスに書かれた予習、復習は行った」「計画力　予習、復習の学修計画を立てながら実施できた」「計画力　授業の成果を上げるために、自分の学修計画を立てることができた」があった。

表 4 【授業版】社会人基礎力セルフチェツクシートにて、平成 29 年 5 月と 10 月の変化

社会人基礎力 12要素	5月	10月	社会人基礎力 12要素	5月	10月
主体性	38.9%	37.9%	発信力	65.4%	56.7%
働きかけ力	57.0%	49.5%	傾聴力	71.5%	59.8%
実行力	57.4%	48.3%	柔軟力	77.0%	64.8%
課題発見力	52.7%	47.0%	情況把握力	67.2%	57.3%
計画力	49.2%	46.9%	規律性	62.5%	56.0%
創造力	49.7%	46.9%	ストレスコントロール力	73.3%	62.7%

表 5　平成 29 年 10 月の時点で、達成率の高い項目 10 項目

傾	話を聞く時は、うなずきやあいづちをしながら聞いた。	87.1%
発	相手の目(顔)を見て話した。	81.1%
柔	立場によって、意見や考え方が違うということを理解し対応した。	80.3%
ス	自分にとって良くない結果が出ても事実として受け止めることができた。	80.3%
柔	相手の意見や考え方について無視したりせずに尊重できた。	78.0%
発	話をする時、思いついたまま話すのではなく、どう話したら相手に伝わるか考え、話し方を工夫した。	73.5%
ス	ストレスを感じた時、気分転換するための行動を起こすことができた。	73.5%
発	規模に応じて相手が聞きやすい声の大きさで話した。	72.7%
ス	ストレスを感じた時は、友人と遊びに行ったりして気分転換を積極的に行うことができた。	72.7%
柔	自分と異なる意見や考えを理解しようとした。	72.0%

表 7　平成 29 年 10 月の時点で、達成率の低い項目 10 項目

主	シラバスで定められている内容以上の復習を行った。	17.4%
実	シラバスに書かれた予習、復習は行った。	23.5%
主	授業中、発言の機会があれば積極的に発言した。	26.5%
主	次回の授業内容について、テキストの該当箇所や関連する内容を確認し、予習をした。	29.5%
計	予習、復習の学修計画を立てながら実施できた。	31.1%
主	受講する科目のシラバスは全ての項目を確認し、不明な点があった時は、先生に質問して解決した。	31.8%
課	予習・復習の際に学習上の問題点を考えて取り組むことができた。	31.8%
発	話だけで伝えるのが難しい場合には、資料などを用意した。	32.6%
実	シラバスの内容を読み、科目の到達目標を理解していた。	33.3%
創	テレビ・雑誌・新聞などを見て、実際に活用できそうなことを考えついてメモをした。	33.3%

表 6 平成 29 年 5 月と比べ、10 月プラスに達成率が変化した項目

主	授業は欠席しなかった。	7.3%
実	シラバスに書かれた予習、復習は行った。	6.9%
計	予習、復習の学修計画を立てながら実施できた。	6.6%
計	授業の成果を上げるために、自分の学修計画を立てることができた。	6.0%
計	自分の計画を先生に話し、悪いところを指摘してもらうことができた。	4.6%
創	前例にとらわれることなく自分のアイデアを提案できた。	4.2%
課	予習・復習の際に学習上の問題点を考えて取り組むことができた。	4.0%
主	授業中、発言の機会があれば積極的に発言した。	4.0%
主	次回の授業内容について、テキストの該当箇所や関連する内容を確認し、予習をした。	3.7%
創	テレビ・雑誌・新聞などを見て、実際に活用できそうなことを考えついてメモをした。	2.9%
計	計画を実行した後、反省し改善点を考えた。	2.7%
主	シラバスで定められている内容以上の復習を行った。	2.2%
主	予習や授業の中でわからないことがあれば、そのままにせず先生に質問をして解決した。	1.8%
課	目標に対する自分の状況と達成度の差を理解できた。	1.4%
創	知識を学ぶだけでなく、課題を自分なりに工夫して解決した。	1.4%
規	正しい姿勢で受講できた。	1.2%
主	授業で学ぶ以上のことを身に付けたいと考え、自分で学習を進めた。	1.2%
情	授業中のクラスの雰囲気が良くないと察知したとき、自分にできることをした。	1.1%
課	到達目標に達するために自分の課題を考え学習した。	0.8%

7.プロジェクト活動「生デ　まちづくり　プロジェクト」平成 29 年 2 月から平成 29 年 12 月から見えてきたこと

教材の効果(中間評価)を学生の自己評価を学生が書いたレポートを KH コーダ分析から考察すると学生はメンバーと協調してサロン活動をしなくてはいけないため働きかけ力、主体性が身につき、高齢者とコミュニケーションをとるためにはよく聴き、合わせて話をするといったコミュニケーション能力が向上していると自己の成長として捉えている。また、全体会での活動報告で発表の機会があることで、プレゼンテーションをどのようにするか、パワーポイントをどのように作成するか考える発信力、他人の発表を聴き、よいところを伝える工夫をすることができるようになったといっていた。教材としての有用性はある。しかし、【授業版】社会人基礎力セルフチェツクシートにて、平成 29 年 5 月と平成 29 年 10 月の変化からは明らかな変化は認められなかった。

地域にとっては、人が集う場を「大学」として、一か月に一回程度、地域の方に継続的に来ていただく機会をつくりことは、学生と地域住民が関わり、地域住民同士が関わる活動で、地域連帯感を高める「まちづくり」に貢献していることになる。

一度参加された方が次に近所の人をつれてきてくださるという形で増えていっている。サロンの場が、学生と地域の方同士の交流の場となり、顔なじみ関係となり、地域の支え合い（互助）の一助となりつつある。

8.おわりに

今回は、社会人基礎力育成の教材である「生デ　まちづくりプロジェクト」を示し、学生の自己評価から、学習の効果は確認された。

平成29年1～12月の活動は平成28年度愛知学泉短期大学GP事業の支援を行ってきた。継続して、平成30年1～12月の活動は平成29年度GP事業の支援を得て行っていく。平成29年度事業では、社会人基礎力評価表・ルーブリック評価・ポートフォリオ評価を連動させたものの考案すること、外部評価との相関性があるかなどをとりいれていきたいと考えている。学生へのフィードバックに力を入れたいと考えている。

謝辞

「生デ　まちづくりプロジェクト」をすすめていくにあたり協力をいただいた矢作北地域の総代様、民生委員様、はしめ地域包括支援センターの皆様、愛知学泉短期大学GP事業として支援してくださった寺部暁理事長先生、安藤正人学長先生をはじめ、多くの教職員の皆様に感謝いたします。

追記

この事業は平成28年愛知学泉短期大学GP事業で支援をうけて行った活動である。

参考文献

1.鈴木敏江、プロジェクト学習の基本と手法、課題解決力と論理的思考力が身につく、教育出版、2012
2.McTighe,J & Wiggins,G、Understanding by Design、Professional development、ASCD(2005)
3.樋口耕一、khcoder_tutorial.pdf、2012